

『街場の教育論』 『複雑化の教育論』 を読んで

齋藤 直己

この2冊を読んで、「成熟すること」「単純化する社会」「居心地のよい共同体（コミュニティ）をつくること」についてまとめてみました。

1. 成熟すること

成熟することとは、昨日とは違う人間になるということ、どんどんと複雑化していくということ、今までの自分の物差しでは測れなくなっていくこと。

時々、過去の自分の言動を思いだして恥ずかしい気持ちになるのは、少しは成熟したことの証なのか？

学ぶということは、山を登るようなものではないだろうか。学んでいるうちは、何のために学んでいるのかわからないが、ある地点までいくと、ひらけて見渡せる時がある。

●成熟とは複雑化すること（F36）

昨日とは違う人間になるということ

●成熟もまた「昨日まで使っていた装置では検知もできないし、計量もできないものが身についた」というかたちをとる（『困難な成熟』）

●「それまでそんなふうに見たことのない仕方でものごとを見るようになった」「それまで、そんなものがこの世に存在するとは知らなかったものを認識した」（『困難な成熟』）

●成熟は葛藤を通じて果たされる（M114）

学ぶべきことは「ねじれくれた社会の、ねじれくれた成り立ち」についての洞察

●「どうふるまってよいかわからないときに、適切にふるまう」能力（M120）

わからないことがあれば、わかっていそうな人に訊く（M120）

自分でできないことを誰に頼めばよいか知っている（M104）

●自分を「マッピングすること」が基礎的な知性の訓練（M96）

●葛藤：大人たちの言うことが「首尾一貫していない」（M130）

2. 単純化する社会

クレーム対応や責任問題などで、教育の現場の他、社会のあらゆる物事がマニュアル化されたり数値化されたりしている。

そのことにより、単純なものはどんどん複雑になり、複雑であるべきものごとは単純化されていっている気がする。

①単純化されるメディア

→わかりやすいことが正義

→できるだけ短くわかりやすい見出し（雑誌やYahoo!ニュース）

→話を単純化するワイドショーのコメンテーター

→メディア化された政治（『誰が「橋下徹」をつくったか』）

②行政の言う不平等な「平等」

→現場に権限を与えない、（無駄な）書類が全てのようなところがある

●ブルシット・ジョブの話（F102）

先生の本来の職務は、「子どもたちを成熟させる」という単純なことのはずが、多くの無駄に複雑なブルシット・ジョブにより、学校が居心地の悪い場所になってきているのではないだろうか。

←無駄な書類は、マニュアル化／数値化のためであろうか？ そもそも点数をつける必要のないこともありそう

●無意味なタスクの話（F128）

無意味なタスクと聞いて、まっさきに思いだしたのが、コロナ禍の学校の対応のニュースです。生徒が来る前の教室を先生が一生懸命消毒をしていた。

●学校は営利企業ではない（F141）

学校は、単純にいい悪いを数値的に評価できるものではない。

→学校教育の「成功」は事後的に判定できる。

→利他は未来からやってくる（『思いがけず利他』より）

●「いじめ」の構造

複雑な問題を単純化しようとする簡単なソリューションの残骸

ほどけそうな結び目を探してひとつひとつほどいていくしかない（M174）

→あらゆることはこういうことだと思ふ。地道にひとつずつかたづけていくしかない。

〔余談〕

真心ブラザーズの「緋色」という曲に「単純なことを複雑にしないでよ／複雑なことを単純にしないでよ」というフレーズがある。

3. 居心地のよい共同体（コミュニティ）をつくるということ

学校などの場所を居心地のよい場所にするにはどうすればよいか。一人一人が機嫌よく過ごすよう努力することが必要ではないか。教育が、理想とする共同体とは何かを教えるということであれば、学校も理想的な場所であった方がよい。少なくとも目指すべきではないだろうか。そういう意味合いにおいて、現在の学校の多くは教育的でないのではなかろうか。

- 職場を明るくすること（F63）

好きにやってください、私が責任をとります

- 集団に属する人が全員『僕みたいな人間』でも、とりあえず気楽に暮らせるような人間であること（F89）

- 社会的活動は「協働」であって「競争」ではない（M210）

学校も会社も「競争」だと思っている人が多い。社会全体でそういう流れを作りだしているのではないか。

- グレーゾーンのジョブをすることの大切さ（M220）

雪かきの労働の大切さ

- 機嫌のいい人間が同期現象誘発者となる（F244）

〔余談〕

津村記久子さんの機嫌の悪い父の話（『ちゃぶ台8号』より）

ハラスメントとは一人でいられないことの亜種だ

暴力もまた、一人または集団が「一人でいられない」ことのもっとも歪でくそな結果だ

【発題】

- 成熟することについて、取り組んでいることは何ですか？
- （日本の）社会が単純化していて危うく感じることは何ですか？
- これから時代、居心地の良い世界にするにはどうすればよいでしょうか？

◎自分自身と教育との関係性について

1978（昭和53）年生まれ

1985（昭和60）年～1991（平成3）年

小学生・田舎の小さな公立小学校、受験には無関係。先生も自由な感じがしていた。自由な先生を見て、小学校の先生になりたいなと思っていた。

1991（平成3）年～1994（平成6）年

中学生。田舎の中くらいの公立中学校、小学校よりは校則など少しきびしめではあったが、まだ自由な雰囲気はあった。中学校の先生もいいなと思っていた。

※兄の担任が阪神ファンで学級通信が阪神寄りだった。ラーメン棒など。教育や受験戦争に疑問を持つ。

※統計グラフコンクールのテーマ：受験戦争

※校内弁論大会の題材：日本の教育問題について

→受験戦争は、自分たちのあたりがピークになるのではないかと思っていた。

こんなばかばかしいことがいつまでも続くとは思わなかった。

1994（平成6）年～1997（平成9）年

高校生。市内の一応進学校。自由な雰囲気の学校。先生方も自由な感じがした。校則もあったが、わりと自由だったが、だんだんときびしめになっていった。

特に学問に対して熱心でない人たちも、どこかの大学に行くことを目指していた。

どこでもいいから、できるだけ簡単に合格することを目指している人もいた。

授業は休んでも定期テストでよい点をとって内申点をあげる努力をする人もいた。

1997（平成9）年～2001（平成13）年

大学生。早稲田大学第一文学部フランス文学専修。あまり真剣に文学研究はできなかった。卒論もレベルの低いものに。

教員免許はとらなかった。←教員免許をとろうとしていた人たちがあまり好きになれなかったから。

フランス文学専修を選んだ理由：早稲田のフランス文学専修の先生たちが楽しそうだったから

2000年代前半

転職のはざまの時に、数ヶ月塾のバイトを経験。親に言われて来ている子どもたちと接する。